ひと

地域密着型の市民ラジオです

秋田コミュニティー放送
パーソナリティーのみなさん

旭川と木々に囲まれた大町のスタジオで(下段中央が中山さん)

十月下旬の開局に向けて、秋田コミュニティー放送では、番組を切り盛りするパーソナリティーのみなさんが厳しい研修に励んでいます。

秋田コミュニティー放送は、県内初のコミュニティーFM(超短波)放送局。放送区域を秋田市内に限定し、より地域に密着した情報をお届けします。

当面の放送時間は朝五時から深夜一時までで、番組の半分以上が自主制作。自分の番組は、企画から機械操作、選曲まで全て一人で担当します。様々な世代のリスナーに合わせて募集した十四人は、五十代のお父さんや主婦、フリーターに高校生と個性派ぞろいです。美術工芸短大一年の中山潤子さんもその一人。「ノリがよくて楽しくて、流行の話題もたくさん盛り込んで、でも何か考えさせられるような番組をつくりたい」と、これから担当する週末音楽番組の構想を練っています。

ただ聞くだけのラジオではなく、話し手聞き手双方が気軽に情報を発信できる対話型のラジオ局が目標だとか。開局はもうすぐ。身近な情報発信基地として、地域の活性化にも一役買いそうな予感です。

おしゃべり

山王ライオンズクラブ会長境田秀一さん(右から2人目)と患者さんを交えて

精神的なケアに役立てて

市立病院の正面にあるポケットパークにベンチ4つを寄贈しました。患者さんの憩いの場所になればと、クラブのメンバーが手作りで仕上げたぬくもりあるベンチです。緑をながめながら気分転換、心のケアにも役立ててもらえたらうれしいですね。

かわらばん

充実感いっぱいの催し

私は視覚障害があり、このような催しでは遠慮ぎみだったのですが、今回は自分も楽しみたくて、準備段階から進んで加わりました。疲れたし、迷惑もかけたけれど、うれしい出会いがたくさん。会場は盛況でしたし、充実感いっぱいの催しでした。

ボランティアフェスティバル実行委員を務めた椎名靖和さん

駅前も変貌しそう

秋田駅東西自由通路の延伸計画の展示を見て、赤川直子さん(左)と鈴木春菜さん

普段も使っている秋田駅の東西自由通路が、イトーヨーカドーまで延びたら、絶対便利。とても助かります。フォーラスまでつながってくれれば、もっとうれしい。でも、完成までどれくらいかかるのかしら。工事中、不便になるのは困るわ。

移動市役所

市長が各地域に出向いて、いろいろな意見の交換をしています。

問い合わせ 広聴相談室☎(866)2039

●仁井田地区
10月21日(水)午後1時30分～
仁井田中央会館

●浜田地区
10月25日(日)午後2時～
浜田地区コミセン

私の乱読日誌 本の抄々

――この国のかたち――

市長 石川錬治郎

司馬遼太郎さんが亡くなって二年以上も過ぎているのに、司馬文学はますます国民の間に広まり、文字どおり国民的作家となった感がある。私も人並みには司馬文学を読んだほうであるが、どちらかといえば、文学よりは随筆などのほうが考えがはっきり出ていて、好きである。数ある随筆――それは司馬節と言ってもよいが――のなかでも、代表的なものが「この国のかたち」ではないかと思う。

本書はアトランダムな二十四項からなっていて、どの項を読んでも面白い。例えば、「1 この国のかたち」で著者は次のように述べている。

『日本人は、いつも思想はそとからくるものだと思っている――とはまことに名言である。ともかくも日本の場合、ヨーロッパや中近東、インド、あるいは中国のように、ひとびとのすべてが思想化されてしまったというような歴史をついにもたなかった。そのくせ、思想へのあこがれがある。日本の場合、思想は多分に書物のかたちをとってきた。……歴世、輸入の第一品目は書物でありつづけた。思想とは本来、血肉になって社会化されるべきものである。日本にあってはそれは好まれない。そのくせに思想書を読むのが大好きなのである。こういう奇妙な―得手勝手な―民族が、もしこの島々以外にも地球上に存在するようなら、ぜひ訪ねて行って、その在りようを知りたい』

このような調子の文章が種々のタイトルのもとに、二十四項並んでいるのである。

この本の「あとがき」で司馬さんは、一九四五年八月、敗戦の頃に本土決戦に備えて、軍隊が駐屯していた絹織物の町、栃木県佐野市の状況に触れて、本書のモチーフを次のように書く。

『軒下などで遊んでいるこどももまことに子柄(こがら)がよく、自分がこの子らの将来のために死ぬなら多少の意味があると思ったりした。が、ある日、そのおろかしさに気づいた。このあたりが戦場になれば、まず死ぬのは、兵士よりもこの子らなのである。

終戦の放送を聞いたあと、なんとおろかな国に生まれたことかとおもった。(むかしは、そうではなかったのではないか)と、おもったりした。むかしというのは、鎌倉のころやら、室町、戦国のころのことである。やがて、ごくあたらしい江戸期や明治時代のことなども考えた。いくら考えても、昭和の軍人たちのように、国家そのものを賭けものにして賭場にほうりこむようなことをやったひとびとがいたようにはおもえなかった。

ほどなく復員し、戦後の社会のなかで塵にまみれてすごすうち、思い立って三十代で小説を書いた。当初は、自分自身の娯しみとして書いたものの、そのうち調べ物をして書くようになったのは、右にふれた疑問を自分自身で明かしたかったのである』

ここには明白に司馬文学の本質が述べられている。司馬さんは、自分で書いてきた戦後の「この国のかたち」に深い危機感をもち世を去ったと私は思う。私たちは今、司馬流「この国のかたち」と違うもうひとつの「この国のかたち」を求めなければならないのではないかと思案する昨今である。

「この国のかたち」司馬遼太郎著　文芸春秋社刊　平成二年三月